

現在の戦争が影を投げかけたドイツの敗戦 80 周年記念

池永記代美 (ベルリン・女の会)



ベルリン州は今年の敗戦記念日を祝日にした。ブランデンブルク門前では、戦争終結につながったベルリン陥落の様子を写真と解説文で紹介する屋外展示が行われた。

1945 年 5 月 8 日に連合国に全面降伏したドイツは、日本よりひと足先のこの 5 月、敗戦 80 周年記念日を迎えました。平均寿命に匹敵する 80 年が過ぎ、戦争を直接体験した世代がますます減っ

たことを痛感した記念日でした。ベルリンから 100 キロほど北にある女性強制収容所ラーベンスブリュックで 20 年前に行われた解放記念式典では、フランス、ポーランド、ロシアなどから来た多くの元収容者たちが再会を喜び合っていました。今年の式典に参加できた元収容者はたったの 9 人。11 年前の式典で知り合いになった、母親を同収容所で失ったというドイツ人女性は、母親を知る人がいなくなったので、今年から式典に行くのをやめたそうです。

戦争が遠のき、ドイツの記憶文化に転換点が訪れたことを示す「記憶・責任・未来」財団と「学際的紛争・暴力研究所」による調査結果も報道されました。ナチが身体障害者などを虐殺した「安楽死」作戦を説明できる人は 35.5% しかおらず、「ナチの加害責任を問うのはもう終わりにする」という意見に賛成する人は 38.1% に上りました。2018 年に調査を開始して以来、ナチの加害責任をこれ以上問わないことに賛成する人が反対する人 (37.1%) を初めて上回り、調査を行なった専門家は「多くの人にとって、ナチ時代は歴史上の単なる一つの時代となり、現在の価値基準を規定するものではなくなった」と分析しています。ベルリン名誉市民で、ナチによる迫害体験を語り続けてきたマーゴット・フリードレンダーさん (『wam だより』Vol.38 参照) が、5 月 7 日、ベルリン州政府と議会による記念式典で挨拶をした翌日に 103 歳で急逝したことも、私たちが道標にしてきた灯火が消えてしまったように感じました。

イスラエルの介入、ロシアへの対応

現在起きている戦争が大きく影響したのも、今年の記念日の特徴でした。ナチ時代、計 28 万人が収容され、約 5 万 6000 人が命を落としたブーヘンヴァルト強制収容所の解放記念式典では、イスラエル系ドイツ人哲学者オムリ・ベーム氏がスピーチを行う予定でした。普遍的な人権の価値について高い水準の考察が期待できると、同収容所記念館館長が招待したのです。ところが駐独イスラエル大使が、ベーム氏はホロコーストを相対化し、パレスチナとイスラエルの連邦国家建

設を唱え、イスラエル国家の存在を疑問視していると激しく攻撃。彼にスピーチさせれば、ホロコーストの犠牲者やサバイバーを侮辱することになると、招待を取り消すよう求めました。このような介入は 25 年の

館長歴で初めてだと館長は憤慨しましたが、イスラエル大使との軋轢にサバイバーを巻き込みたくない、ベーム氏の招待を延期する形で、式典のプログラムから外しました。ベーム氏が所属するベルリン・ペンクラブは、イスラエル大使はドイツの記憶文化の審判ではないと批判すると同時に、自らの信念を裏切り、独裁的傾向を持つ政府の代表がかかる圧力に屈した館長に、圧力に耐えることを学べと呼びかける声明を発表しましたが、大きなニュースにはなりませんでした。

もう一つの戦争、ロシアのウクライナ侵攻を受けて、ドイツ外務省は今年の記念式典にロシアとベラルーシの代表を招待しないよう勧告を出しました。式典がプロパガンダに利用されると判断したのです。しかし、ベルリンの 70 キロ東にあるゼーロウ高地で行われた式典で、地元自治体はロシア大使の参加を拒みませんでした。ゼーロウ高地では第二次世界大戦末期に首都ベルリン侵攻を目指すソ連軍とドイツ国防軍の間で激しい戦闘が繰り広げられ、ソ連側は 3 万 5000 人、ドイツ側は 1 万 6000 人の兵士が亡くなりました。そのため駐独ロシア大使館と地元自治体が協力して、今でも遺骨収集や埋葬が行われています。そ

うした理由から地元の政治家たちは、ロシアの戦没者も追悼する式典からロシア政府の代表を排除することはできないと考えたのです。一方、ロシア大使が式典に参加することを知ったウクライナ大使は、式典に出席しませんでした。

宗教や国籍の違いを超えて、かつての敵も味方も共に犠牲者を追悼することで不戦を誓ってきたのが、ドイツの追悼のあり方でした。現在進行形で新しい戦争が行われている中、それが困難になってしまったのは残念です。(写真は筆者撮影)



ドイツの無条件降伏文書の調印が行われた建物 (ベルリン東南部)。今はロシア、ベラルーシ、ウクライナ、ドイツの団体が共同運営する「20 世紀の独ソ関係」を紹介する博物館になっているが、ロシアのウクライナ侵攻以降、ウクライナ国旗のみ掲げられている。



ゼーロウ高地にそびえ立つ戦没ソ連兵追悼記念碑。地元自治体は、式典はソ連の勝利を祝うためではなく、すべての戦没者を追悼するためだとして、ドイツ外務省の方針に従わなかった。